加茂豆腐

ル 4
6319
7

北越雪譜二編卷之四

目録

○異獸
○弘智法印
○白鳥
○浮島
○美人
○苗場山
○鶴恩ふ報
○火浣布
○土中の舟
○両頭の蛇
○石打明神
○蛾眉山下標準
○三四月の雪

通計 十三條

萩野藏

98-66

北越雪譜二編巻之四

越後　鈴木牧之編選
江戸　京山人百樹増修

○異獣

魚沼郡堀内より十日町へ越る所七里あまり村々あるとぞ山中の間道ありさてある年の夏のすゑつかた十日町のちゞ問屋ありの内の問屋へ白縮ゐるふねどいをぎおるゞ〜とらひこ〜けるゆゑその日の昼をゞる頃竹助とのふ剛夫をえ〜〜荷物をおせこ〜いゞ〜たけりかゝて途も猶く半ふいゝるころ日ぞ〜ハ七ッふち〜竹助ちぞ〜とくとちのかゝ〜の石ふ腰かけ焼飯をくひゐるふ谷間の根笹をか〜こけく來る者ありちくよりたるを見るゞ猿ふ似て猿ふもあ〜ぞ頭の毛長く脊ふたゞさるゞ半ハちろ〜丈ハ常並の人よりたゞく顔ハ猿ふ似く赤ゝ〜ぞ眼大ふして光りあり竹助ハ心剛ある者ゆゑ用心ふきゝ〜ゐる山刀を提ゝ〜バ斬んと身ゞまへけるふ此ものハさる氣色もなく竹助が石の上ふちきゝる焼飯ふ指〜〜ゝとよと

たゞふさゐゐり竹助をろえく投与へけるゞ〜〜げふこひゝり是ふて竹助心をゆ〜〜又もあこけるゞちくよりく〜こひけり竹助ハくゆ我ハゝりの内より十日町へゆくものゝりあもハこををゝるゞ〜又きゝ〜をゝ〜ゞ〜ゐをぎのつゝひゐるゞゝ〜ちきたる荷物をせるゝんとせ〜ふゝのの荷物をとりくかゝるゞとかふけきふ立てゆく竹助きそハきゝ〜の礼ふゝをたをゝるゐ〜んとあとふつきそゆ〜ふかのゝのハくふゝのゐたゞゞ〜竹助ハ峻岨の道をゝゞたゝふゆをく

ゐゝを一里半あまりの山をちをこえて池谷村ちくふゝ〜〜時荷物をバゐろ〜山へけのゞるそのをゝ事風の如くゐゞと竹助ゞ十日町の問屋ふく〜ゝ〜語り〜〜ゝとく今ふゝひてふ是今より四五十年以前の事ありその頃ハ山ゐをぎをゝるゝのをゝゞ〜ハ此異獣を見るゝのもありしとぞ○前ふゝの池谷村の者の話ふ我ゝ十四五の時村ゝちの娘

ふ機の上手ありて問屋より名をさしてちごをあつらへまいらせ
雪のきえのとりする図のもとふ機を織てゐるふ図の外ふ立るを
ちとび猿のやうゐて顔赤くずかしらの毛長くたてて人よりハ大
なるげさしのぞきけり此時家内の者ハこゐる山うせぎふいでもむすめ獨り
あるとびとさしふ惧きもどろき逃んとすれバ機ふかくれバ腰ふまれ
つけたる物ありて心ふまかせぞとうくそうちゐるものの立さりぬべて
かまどのもとふ立きたりふ飯櫃ふ指して欲きさゐるり娘此異獣の
事をうゐさ聞たるゆゑ飯を握りて二ツ三ツわさけまばうましけふ
持さりけりちのち家ふ人ゐるき時ハをりて来りて飯をもふゐゑ
後ふハ則さもそうしてもまるぞくんせり○さて此娘　尊用ありて
急のちごをおりかけふ折ふ月水ふありて　御機屋ふ入る事
ゐるず御機屋の事初編ふ委しく記せり手を停め居まバ日限ふ後る娘ハさしあり双親も

此事を患ひ歎きけり月やくより三日ふあたる日の夕ぐれ家内のもの農
業よりかへりざるをあやしふやかのもの久しぶりゆくきたり娘人ふ
ものいのごとく月やくのうまひをかうつて栗飯をゆぎりてあたへなバ
きいのごとくそぐふ立さるぞもぐものあるふさゐるてなちさり
けりさて娘ハ此夜より月やくとなりしゆゑ不思議とおもひゐる
身をきよめて御機を織果ちの父問屋（持去り往着）とおもふ頃
娘時ゐるず俄ふ紅潮ふありしゆゑさて我ゲ歎きを聞てかのもの
我を助しゐんと聞く人くも不思議のおもひをゐしけりと語り
ちのころハ山中ゆくなまさろふ見たるものもあり一人ゆても連ある時ハ
形を見せぞとぞ又高田の藩士材用ゆく樵夫をもとぐ黒姫山ふ入り
小屋を作りて山ふ日をうつせ時猿ふ似て猿ゆもあるぎる物夜中
小屋ふ入りて焼火ふあたりたけハ六尺ばかり赤髪裸身通身灰

山中異獣の圖

秋月葦牧之葦山

色ふく毛の脱するに似たり腰より下に枯草をまとふ此物よく人のふとことふるさぐひくのちはよく人に馴しと高田の人のくりき按るに和漢三才圖會寓類の部に飛騨美濃あるひは西国の深山にも如件異獸ある事をおもひさるべきの深山にもあるものなるべし

○火浣布

宝暦年中平賀鳩渓源内火浣布を創製し火浣布考を著し和漢の古書を引本朝未曾有の奇工に誇まり没してのち其術つたなくず好事家の憾事とせるに我国嘗火浣布を作るの石を産せるの所々○金城山○卷機山○苗場山○八海山その外にもありその石軟弱にして瓜をもつても犯すべきなどの軟なる石ありいろは青く黒しこれをくだけば石綿を出せり此石を得て試るに石中に在る石綿とはものの木綿なるを細く紬なるを三分ばかりなるものあり是を紡績せるに祕術

あるべし火浣布を造るあり其祕術を得ば小女子も火浣布を織るべし

○さて我驛中に稲荷屋喜右衛門とのふるの石綿を紡績せる事に千思万慮を費し竟に自ら其術を得て火浣布を織いだせり又其頃我が近村大澤村の医師黒田玄鶴も同じく火浣布を織る術を得たり各祕〻〻その術を人に傳へざるゆゑ時もてはやし村つきあひにて火浣布の奇工を得たるも一奇事なり是文政四五年の間の事なりき此両人の説をきくに力をつくせば一丈以上あるをも織うべしとも其機工容易なるべしと以り平賀源内が織る五六尺に過ぎと火浣布考にいへりまた玄鶴が源内にまさりたる事は玄鶴は火浣布の外に火浣紙火浣墨の二種を造まり火浣墨を以て火浣紙に物をかき烈火にかけて火とあらしをふるふとりいだし火氣さめば紙も字もそのごとくにあるまでも其實用をなすべ火浣布も火浣紙も火災の供ふに憑べしいんとのまば火の

遇バ俱ニ火トナリ人ハ〻〻火中ヨリいでまゐらせ火と俱ニ碎け〻形をも
なしたゞ灰となるのみなり酸鼻ニ用うる所さゝ〻〻あるべし　源内
死〻〻奇術絶て〻〻ニ件の両人ハ火浣布の機術再世ニいでゝ
嗚呼可惜此両人も術をつくせ〻〻没〻〻て火浣布ふたゝび世ニ絶
てりかの源内ハ江戸の饒地ニ火浣布を織〻〻もの其聞え高〻〻もの
両人ハ越後の辟境ニ火浣布をもり〻〻もの其名低〻〻もの〻ふたゝ
〻〻好事家の一話ニ供す

○弘智法印

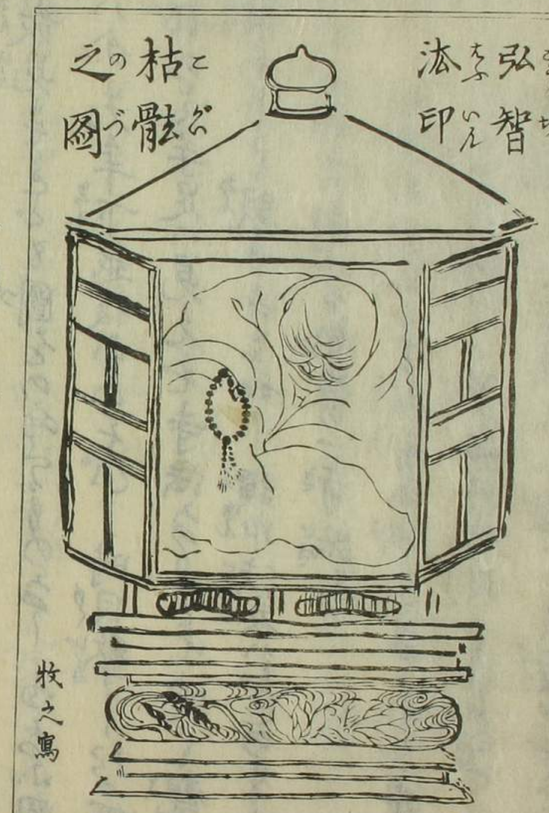
弘智法印ハ児玉氏下総国山来村の人なり高野山ニあり〻〻密教を
学び後生国ニ皈り大浦の蓮花寺ニ住〻〻行脚して越後ニ来り三
嶋郡野積村里言海雲山西生寺の東岩坂とのふ所ニ錫をとゞめて草
庵をもとゞ〻〻ニ貞治二年癸卯十月二日此庵ニ寂せり辞世とて

口碑ニつたへる哥ニ「岩坂の主を誰ぞと人問ば墨繪ニ書〻〻松風の音」
遺言なりとて〻〻死骸を不埋今天保九年ニ至る事四百七十七年ニいたる
り〻〻枯骸生るが如〻〻是を越後廿四寺の一ニ数ふ此事雑書ニ
散見せるもとゞ〻圖をのせたるものなし〻〻ゆゑニ圖をとゝのへ此圖
ハ余先年下越後ニあるとき〻〻時目擊〻〻たる所なり見る所ニて面
部の〻〻手足ハ見えど寺法なりとて近く観る事をゆるさゞ閉眼
皺あり〻〻眠りたるが如〻〻頭巾法衣ハもとのまゝニあるべし
是他国ニハ聞ざる越後の一奇跡なり

百樹曰唐土ニも弘智ニ似たる事あり唐の世の僧義存没して
のち尸を函中ニ置毎月其徒ときをいでゝ爪髮の長さを剪
薙常ときを百餘年を経〻〻も廃せざりしが後国のとゞれるニ
因てときを火葬せ〻〻とゞ又宋人彭乘が作墨客揮犀ニ

弘智法印

枯骸之図



牧之寫

劉州の僧无夢も尸を不埋爪髮の長さる義存ふ同じかりしが婦人の手ふ摸らまとより爪髮のびざりしとぞ事ふ五雜組ふ記て枯骸の確論あまども釈氏を詰ふ似さる説ものべたふ贅せぞ。高僧傳ふ義存が支あり〳〵と覚しふのまふとく詳究せぞ

○土中の舟

蒲原郡五泉の在一里ばかりふ下新田とのふ村あり或年此村の者ども夏あるく阿加川の岸を掘しふ土中より長さ三間ばかりの舟を掘ひあり全体少しも腐ぜ形今の舟ふ異るのみならず金具を用うべき処ところ鯨の髭を用ひて寸鉄をもわどしる処を一木もまと何の木なるを弁ずる者なく〳〵ちとくハ異国の舟なんとふりとぞ余下越後ふ遊び一時杉田村小野佐五左門が家ふてかの舟の木ふて作りたる硯箱を見しふ木質漢産ともふまき上古漂流の夷舟ふやあらん

○白烏

前ふもふる如く雪譜と題するものふ他事をふふハ哥ふふの落題なれど雪ハまと未ふふづ〳〵姑くまりひいでたふまるを○天保三年辰四月我が住塩澤の中町ふ鍵屋某が家のわとりハ喬木あり此樹ふ烏巣をむすび雛稍く頭をひいでそろ巣のうちふ白き頭の鳥を見る主人怪しと人をして是を捕へしふ全身ハ烏ふして白く觜眼足ハ赤き烏の雛なり人く奇として集り観る主人俄ふ籠を作りて心を盡して養ひ

や長じて鳴音も鳥に異なるまで我が近隣なるまづ朝夕ここを観て奇鳥なるまづ乞ふ人も多く江戸へ出て観物ふせんなどいひても有しが主人をしたがへるまづかくて其冬雪中ふかう山の鼬狐などの餌ふと人家ふきてうて食をねらひ事雪中の常なるまづ此ものゝ所為ふや籠ハやぶまて白鳥ハ羽ぬり椽の下ふありしとき初編ふ白熊の事を載たるゆゑ白鳥もまこてふ記しぬ

○両頭の蛇

文政十年亥の八月廿日隣驛六日町の在余川村の農人太左門の軒端ふ両頭の蛇いでるを捕ふ長さ一尺ふて七の頭二ツ並びて枝をなせのこいろもかたちも常の蛇ふうてあるふまるせて古き箱ふいれ餌もいまもきて小二三日をぎていの逃やきてやあてりをなづけてうどをぎりてとぞ

○浮嶋

小千谷より西一里ふ芳谷村といふあり郡殿の池と云四方三町斗の池ありて浮嶋十三あり晴天風なき時日出るまづ十三の小嶋おのゝ離散して池中ふ遊ぶが如し一日入るまづ池の正中ふあつまりて一ツの嶋となる此池ふ種くの奇異あるまでも文多けれども羽州の浮嶋ハものふ記しして人の知る処なるまで此うきふ海ハ有る人まれなり

○石打明神

小千谷の内農人某の地面ふ小社あり石打明神と云昔より祀る処也その縁起ハ聞もせず贅肉あるものの此神をいのり小石をもつてうがを撫社の椽の下の簡子の内へ投いるまおくふ日あるまでいでのおつる事奇妙なりさんげいまする小石いつとなく人の圓めるごとく圓石とあるも又奇妙なりぎりさまバ社のえんの下ふ大小の

圓石満こちとり○百樹曰余も小千谷ふ遊び〜時此石を視て話柄ふ一ツ持帰んとせ〜ふ所の人のいはく此神是石を惜て玉ふとらひつゝふときて取るをゆるの処ふ〜〜〜〜視るふ数万の石人の磨ゆる玉のごと〜凡神妙ハ肉知を以て測ぶべ〜ぞ

○美人

百樹曰小千谷の因ふ〜の余小千谷の岩居が家ふ旅宿せ〜時天保七年八月或日筆を採ふ倦山水の秋景を観ぶべ〜〜〜獨歩のぶ小千谷の前ふ流る〜川ふ臨岡ふのぶり用意〜る書を〜〜毛氈を老樹の下ふ敷き烟〜ゆ〜せつ〜眺望バ引舟ハ浪ふ遡り〜うござるが如く下る舟ハ流ふ順ふ〜〜飛ふ似たり行雁字をゆ〜〜帰樵画をひ〜〜群木ハ少〜〜く霜を染て紅く連山ハ僅ふ雪を載て白く寒国の秋景江戸の眼を新ふゆ〜〜〜〜一絶を得ゆどゝ〜て去

ぶ〜〜ゆゆゆるをり〜〜も十六七の娘三人ものく〜柴篭をせるひ山をのぶりて〜ふ〜〜ひゆふゆんものひふ〜〜てこらふをきて〜余ハ山水ふ目を奪ハるとるふ「火をかゝふさま」〜〜烟管さ〜〜よせる顔を見るバ蓬髪素面ゆて天質の艶色花ともいつべく玉ふも比べぶ〜百結の鶉衣此趙璧を羅む余悄然〜山水を棄て此娘を視るふ一揖〜〜去り樹の下の草ふ坐〜てあ〜をゆげぶ〜きせるの火をうつ〜〜むをゆ三人ひと〜〜〜吹烟双無塩獨の西施と語るハ兼葭蒹葭玉樹ふよるゞ如く皓歯燦爛と〜〜〜ふハ白芙蓉の水をいで〜微風ふ揺がごと〜嗟乎惜ぶ〜〜〜〜〜〜〜美人も是邊鄙ふ生る昏庸頑夫の妻となり巧妻常ふ拙夫ふ伴ふて眠り荊棘と俱ふ腐らん事憐ふ堪えず若江戸ふいでゝ朱門ふ解語の花を開あるひハ又青樓ふ揺泉樹の栄をゆ〜此隣國出羽ふ生まれる

小野の小町が如く美人の名をもあまべきふ此美人を此僻地ふ出すハ天公事を解さるふ似たりと獨歎息しつゝ言んとすゝ娘ハ去來とゝふゝび柴篭をせおひうちつれたゝ立さりけり目送ゝ頗越後ふ美人多くと人の口實ふいふもうべあり是無他あ水ふるゆゑありさまゝ織物の清白なる越後の白縮ふ勝まゝふあゝ此邊ハ白縮を産する所あり以ゝ其水の至清なるを為べし江河潔清なまハ女ふ佳麗多くと謝肇淛ぶいひしも理ありとおもひつ旅宿ふ帰り云ゝの事ふゝ美人を視ようと岩居ふ語りけまハ岩居の渠ハ人の知る美女あり先生を他國の人と眼解欺ゝなどこの火を借るあん可憎ゝ「ゝ」ゝふもべらず吾なぞこの火を借て美人ふえん縁をむすびくと戯言けまハ岩居手を拍ゝ大ふ笑ひ先生誤りうまハ屠者の娘ありと聞ゝ再び悄然ゝり糞壤妖花を出さゝハかゝる事ゆゑいひくあるべし

○再按ふ小野の小町ハ羽州の郡司小野の良實の女あり楊貴妃ハ蜀州の司戸元玉が女あり和漢倶ふ北国の田舎娘世ふ美人の名をつゝふ北方ふ佳人ありといひしも北ハ陰位なまハ女ふ美麗を出さゆゑわゝん二代目の高尾ハ陸奥州ふ生まれ初代の薄雲ハ信州ふ産しゝふ北廓ふ名をあせりさまハ越後ふ件の美人を見くも北国あまべあるべし

○蛾眉山下橋柱

文政八年乙酉十二月筑羽郡越後椎谷の漁人椎谷ハ侯の御封内あり ある日椎谷の海上ふ漁くて一木の流まハ漂ふを見て薪ふせんやとゝ拾ひ取て家ふくり水を乾さんとゝ庇ふ立寄まくを椎谷の好事家通りかゝり是を見ゝたぐあるぬ木とおもひ熟視ふ蛾眉山下橋と五大字刻くあり

〻をもつて〻かの国の物とおもひ漁人ゆハ薪をもつてもひうけきるとぞ
さて余が旧友觀励上人ハ椎谷ざの田沢村浄土宗祐光寺強学の聞えあり嘗て好事の癖
あるを以て〻かの橋柱の文字を双鈎刊刻して同好ふもとり且橋柱ふ題
する吟詠をこゝ是も又梓ふして世ふ布んとせるまゝ〻ぶ故ありて〻いまゞ
不果うの橋柱ハ後ふ御領主の御藏となり〻とぞ椎谷ハ余が同国なるゆ
ども幾里を隔てるゆゑ其真物を不見今ふ遺憾とせ姑傳寫の圖を
以て〻ふ載つ。百樹曰牧之翁が此草稿ふのせる畫を見るふ少〻〻くもとゝふ所有
ゆゑ其實説を詳究せ〻事左の如し
百樹曰了阿上人が和哥の友相場氏ハ椎谷侯の殿人ときて上人
の紹介をもつて〻相場氏ふ對面して件の橋柱の事を尋ゆ〻ふ
余ふ謂〻ハ橋柱ふハ〻ず標準ありとて俗ふ書翰帋とふ物
ふ作りてるを出して〻其圖を示さる余が友の画人千春子が真
物を傍ふもきて〻縮圖をして〻娥眉山下齋とふ五字ハ相場氏

こゝ〻心を深めてうつさまて〻とぞ下ふ圖せる彫さる人の頭を
左りふ頑せその下ふ五字を彫つけ〻ハ是より左り蛾眉山下
橋ありと人ふをゝゆる標準ありとて〻俗ふ書翰帋とふ物
渙然たり今俗ふ指を名ゞきてそのきさふをゝゆる所を記
するを間る事あり和漢の俗情ゆゑ〻事ありのさて此標
準を得る實事をきて〻ふ北海ハいづゝの所も冬ふいたゝび常ふ
北風烈〻〻殘へ物をうちよせる椎谷ハなきものふとゞ〻き所
ゆゑ貧民拾ひ取りて〻薪とのゝ事常ありきるふ文政八酉の
十二月例の如く薪を拾ひふ出〻ふ物あるゝ柱のごとく浪ふ漂ふ
をゝゝぶ人の頭とゝゆる物ゆゑ甚兇悪なり貧民等惧きたち
さりものゝうげより見居さるふ此ものの竟ふ殘ふうちあげまゝを
見て人〻立よりてなるふ文字ハあまとども讀者なく是ハ何もの

るんとさゝ〻〻評〻居うをり〻もてふ近き西禅院の童僧
通りかゝり唐詩選ゆゝいちぐそてる蛾眉山の文字を讀こまへ唐土の
物ゐりときて貧民拾ひて持うりさそぶ唐土の物ときて薪ゆも
せぎり〻〻ふ此事閑傳〻〻竟ふ主君の藏とゐり〻〻と語〻ときき
○按るふ蛾眉山ハ唐土の北ふ在る峻岳ゆて富士ゆもくゝぶづき高山
ゐり絶頂の峯双立ち八字をゐそゆゑ蛾眉山とらふゐり此山の
標準日本の北海へゐづききりたる其水路を詳究せんとて唐土
歴代州郡沿革地圖ふ拠て清国の道程圖中を検するふ蛾眉山
ハ清朝の都を距こと日本道四百里許の北ふ在り此山ふ遠〻〻ぞ
〻〻一條の大河東ふ流蛾眉山の麓の河〻皆此大河ふ入る此大河
瀘州を流れ三峽のふもとを過ぎ江漢ふ至り荆州ふ入り。洞庭湖
。赤壁。潯陽江。楊子江の四大江ふ通じて江南を流酒りて東海

ふ入る是水路日本道五百里ばかりゐりさて件の標準洪水ゆて
水ふ入りけん。洞庭。赤壁。潯陽。楊子の海の如き四大江を蕩漾周
流〻〻朽沈ぞ滔〻〻る水路五百餘里を流れ〻〻東海ふ入り巨濤ふ
千倒〻〻風波ふ万顛ぞ是ども新折砕粉せぞ直身挺然と〻〻我
国の洋中ふ漂ひ北海の地方ふ近より椎谷の貧民ふ拾ま〻〻始〻
水を辞ま既ふ一燼の薪とゐるべきを幸ふ字を識者ふ遇ひ〻〻死灰を
のゞま韻客の爲ふ題咏の美言をうけるのそゐ〻〻竟ふ
椎谷侯の愛を奉じ〻〻身を宝車ふ安んじ万古不朽の洪福を
保つ支奇妙不思議の天幸ゐまゝ実ふ稀世の珍物ゐり
縮圖左のごと〻〻　丈一丈餘　周二尺五寸餘　木質并名べ〻ず

蛾眉山下嶠

登苗場山之図

霄間清露湿衣中
無際平蕪四至秋
呼吸極方通帝座
徘徊却愧問天人
吐息毛雲ゝゝ
ゝゝ舞峯の秋
秋月尾牧之

按ずるに蛾娥同韻五何反なるべし相通じて往々書見を橋を喬に作る頗る異体あり依て明人黄元立字考正誤清人顧炎武亭林遺書中に在る金石文字記あるに碑文摘奇藤花亭十種之一あるに楊霖竹菴古今釈疑中の字彙の部など通巻一遍捜索すれども喬の字なし蛾眉山のある蜀の地は都を去る事遠き僻境なり推量するに田舎の標準なるべし学者の書にも必ずや俗子の筆なるべし さればこそ我今の俗竹を竹と仁に誤の類を猶博識の説を俟つ

○苗場山

苗場山は越後第一の高山なり魚沼郡に登り二里とふ絶頂に天然の苗田あり依て昔より山の名に呼なり峻岳の巓に苗田ある事甚奇なり余其奇跡を尋んとする事年あり去る文化八年七月偶友人四人・嘯齋・撫齋・扇舎・物九齋従僕等に食類其外用意の物をもたせ同月五日未明ふたちいで其日は三ッ俣とふ驛に宿り次日曉を侵して此山の袖職に いとりなのゝ紙を乞て案内者を備ふ案内は白衣に幣を捧げて先に もむ清津川を渉りて蘇ふいまり峻道を踏峻路に登るに楢樹 森列して日を遮り山篠生ひ茂りて徑を塞ぐ枯る老樹折まゝ路を 横りたるを踰るは卧竜を踏ごとし一條の渓河を渉り猶登る事半里 許右に折まゝ左りに曲りそのゞる奇木怪石千態万状筆を以 ていひがたし已に半途に至ぶ鳥の声をもきゝず殆東西を弁じがた 道なきごとし案内者はよく知りて さきに山篠をもてはらひ幣を さげてこれを示す藤蔓笠に立ふ叢竹身を隠し石高く徑狭く一歩も平阻のこれを分て午をゞる頃山の半ばに 僅の平地を得て用意したる卧座を木蔭に敷て食を乞て暫く

憩てまこのゆりくて神樂岡といふ所ふいてまりことより他木さくふ
ゐ〳〵俗ふ唐松とのみの風ふたけをのぞきてるゞ梢ハ雪霜ふ枯されん
低き森をゐゝてちかくこふありまこのゆりふゝくゆくゝ御花園といふ
所山樣盛ひき百合桔梗石竹の花あゞそのさゐ人の植ゆゝふ似ゐう
名を考〳〵ざる異草あまこあり案内者ふ問ハバ藥草ありといひまこ
のゆりゆきくゝ棧鬱ある道ふあゝり岩ふとりつき竹の根をカ草と
一歩ふ一声を発〳〵氣を張り汗をゆゞ〳〵千辛万苦〳〵のゆりつくて
馬の背とのふ所ふいゐる左右ハ千丈の谷ありふむ所僅ふ二三尺一脚をあや
まつ時ハ身を粉碎ふゐまゞ〳〵忙怕あゐて竟ふ絶頂ふいゐりつきぬ
○偖同行十二人すゞ草ふ坐〳〵て憩ふ時已ふ下晡ありちゞめ案内者の
いひ〳〵ハ登り二里の険道ゐまバ一日ふ往來もることあゐゐ絶頂ふ小屋在
ちふのゆゐる人必ちの小屋ふ一宿もる事ありといひ今ちの小屋をこゝまバ

木の枝山さ枯草ゐど取りあつめふぢりつゝあゝ匍匐へるゞりふ作りた
るハ野非人のをゞきゐゐりちを今夜のやどりふきゞあるもちりとて
ちゐ〳〵笑ふ僕どもハ枯枝をひろひ石をあつめく假ふ灶をゐ〳〵もこせたる
食物を調ぜんとゝあるひハ水をなづゆて茶を烹まバ上戸ハ酒の烟をいちゞも
をしさ恥至バ越後さゝ浅間の烟を思ひ信濃の連山ちる眼下ふ波濤を千隈
川ハ白き糸をひき佐渡ハ青き盆石をもく能登の洲崎ハ蛾眉をゐ〳〵越前
の遠山ハ青黛をのこせりちふ眼を拭て扶桑第一の冨士を視ゆゞちの
ちゐ雪の一握りを置ゞ如〳〵人〳〵手を拍奇ありと呼び妙ありと称讃ち千
勝万景應接もるふ遑あゝゞ雲脚下ふ起るうとゝまバ忽晴ちく日光眼を
射る身ハ天外ふ在ゞ如〳〵是絶頂ハ周一里とのみ莽くたる平芜高抵の所
を不見山の名ふよぶ苗場とのみ所ちう〳〵こふありちのさゐ人のいひり
ゐる田の如き中ふ人の植ちる雪ふ苗ふ似ゐる草生ひうり苗代を半とり

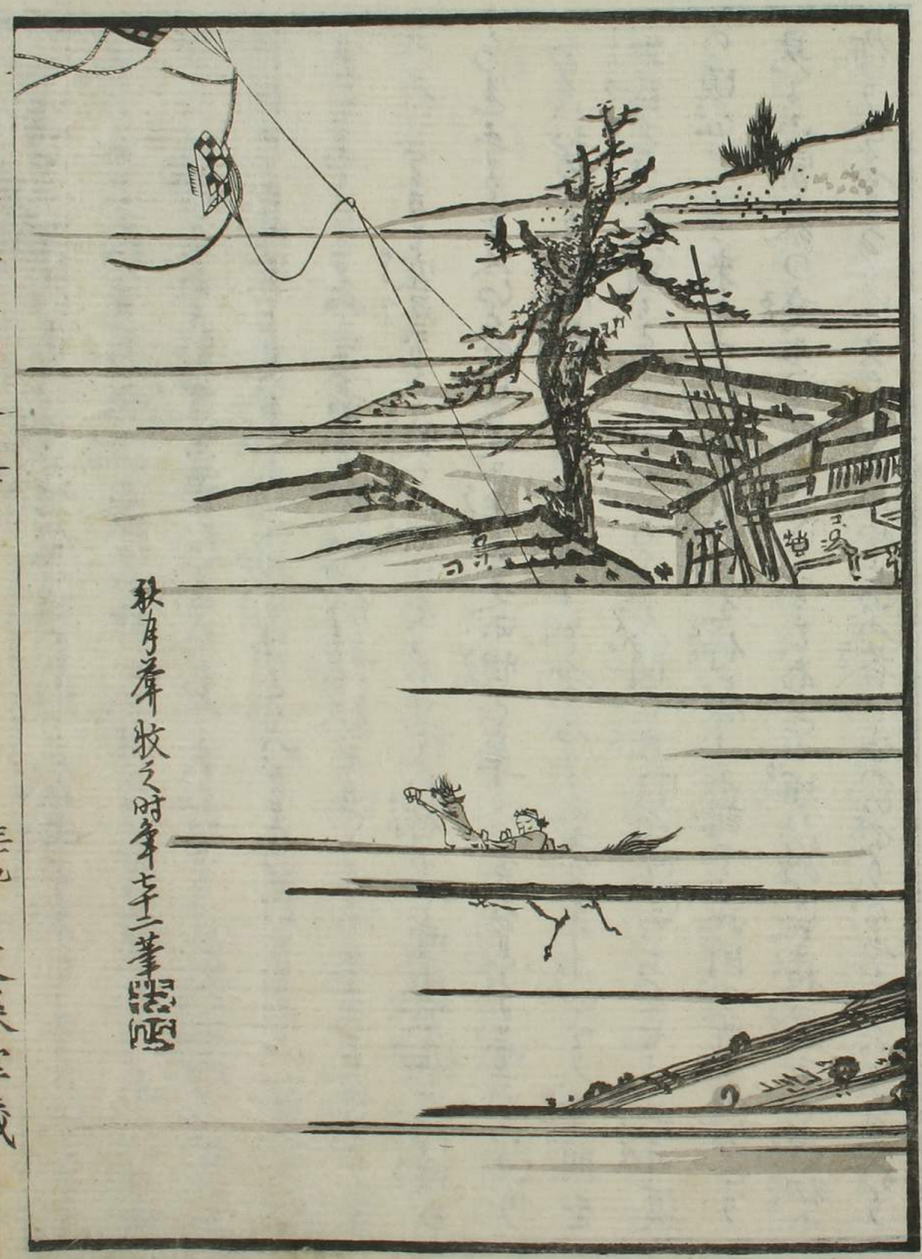
のこりしるゆうある所をとりとゝめを奇ありとおもふ此田の中ふ蛙蛍多し
ありて常の田かゝる事除又ゆゑ旦てりゆも田水枯ぞとぞ二里の巔ふ此奇跡を觀ること
甚不思議の灵山あり案内者いふ〳〵御花圃より別ふ徑ありて竜
岩窟といふ所あり窟の内ふ一條の清水あゞまとのわとりふ古錢多く鞍口二ツ
掛りあり〳〵神を祀るもりより如斯とらひつゝみとのこち今ハ草木ふ塞き
てきとめゞて〳〵とゆり絶頂ゆゑ石ふ刺して苗場大權現とあり案内者ハ岩
人作はゆゑ天然の物とゆり俗傳多べしかと見めゞこち日もぞよゝふ屋ふの内りハ
挑燈をさげくありと外ゆハ火を焼きふてび食をとのゝ〳〵て酒を
酌六日の月皎〳〵とて〳〵空もちゆ紀やりゆく桂の枝もをるべきこちゝ〳〵つ
人〳〵詩を賦〳〵哥をよゝ俳句の吟興もあり〳〵ゆ時をうつ〳〵たゝゆ寒
気次第ふ烈〳〵く用意の綿入ゆもちのだゆて終夜焼火ふあてりて夢も
むすびぞたのくゆのそらまちゝびふえまとりなまばいぞや御來迎を拜

たまへと案内がいのふまりを拜所ふいてり日の昇を拜〳〵ゆゝとのゝて山
をゝびまり別ふ紀行あり云ゆ其畧をゝのゝ○百樹曰余越遊〳〵る時牧之老人ふ此山の地勢
を委〳〵くきて真景の圖をも視るふ巔の平坦ゆる苗場の奇異竜岩
窟の古跡ゆど水ゆも自在の山ゆまばいそ〳〵ふ上古人あり〳〵此山をひゝ紀
絶頂を平坦ふゆ〳〵馬の背の天険をたのゝそ〳〵ふ住居〳〵耕作をゝ
〳〵るゞ込びてのち其灵魂てふとゞまりて苗場の奇異をもゆゆゝと思ゆ
国史を捜究せば其徴をる端をも得べゝや博達の説を聞ん

○三四月の雪

我国冬ハさ〳〵ゆり春ふゆりても二月頃までハ雨降る事ゆ〳〵雪のふるゆゑ
ゆゞ〳〵春の半ふいゝてまば小雨ふる日あり此時ふいゝれば晴天ハものとり雨
ゆも風ゆも去年より積雪をゞの〳〵ふ消るゆりさまでゞ家居ゆゞハ乾ゆ
北東の間ゆる方ハきゆる事ゆて〳〵山〳〵の雪ハ里地よりもきゆる変ゆをけまゞも

市中四月雪解圖


秋牧牽牧之時年十二筆

春陽の天然ゆつるとく雪解ゆ水増て川くゆ水難の患ある事年〻なり
春のさそふいとまゝ人の任あるりの雪ハ自然ゆきあるをまつてゝ家毎ゆ
雪を取捨るゆあるひハ雪を篭ゆいとまゝ去るもあるひハ鋸ゆて雪を
挽割て去るもゝ又ハ日向の所へ杙木のごとくつゝきたるもあるかゆゆゑ
まゝきあることゝなるゆゑなり少〻の雪土をかけ又ハ灰をうゝまばそもく去年冬のそゞめより雪
のふゝざる日も空曇りて快く晴たるそらを見るハ稀ゆて雪ゆ家居を降埋め
らるゝ手もとさへいとゞ見ゆ生ゝ見ゆ慣て年〻の支るまゝ雪ゆあるより
をるハおのづゝ朦然とゝゝ心たのゝゝずあるゆ春の半ゆなり雪囲を
取除まゝ日光明くとゝゝたゞめて人間世界へいでるあちこせゝゝ一年夏
の頃江戸より来りて行脚の俳人を停て〻ゆ謂ゆ此国の所〻ゆなり
見るゆ富家の庭ゆハ手をつくしてあるもあまゝ垣ハいづまも粗畧ゆて假初ゆ
作りたるやうなりいとうるゆゑゆやとゆ荅てゆふぶりのゆゑもとなりかり

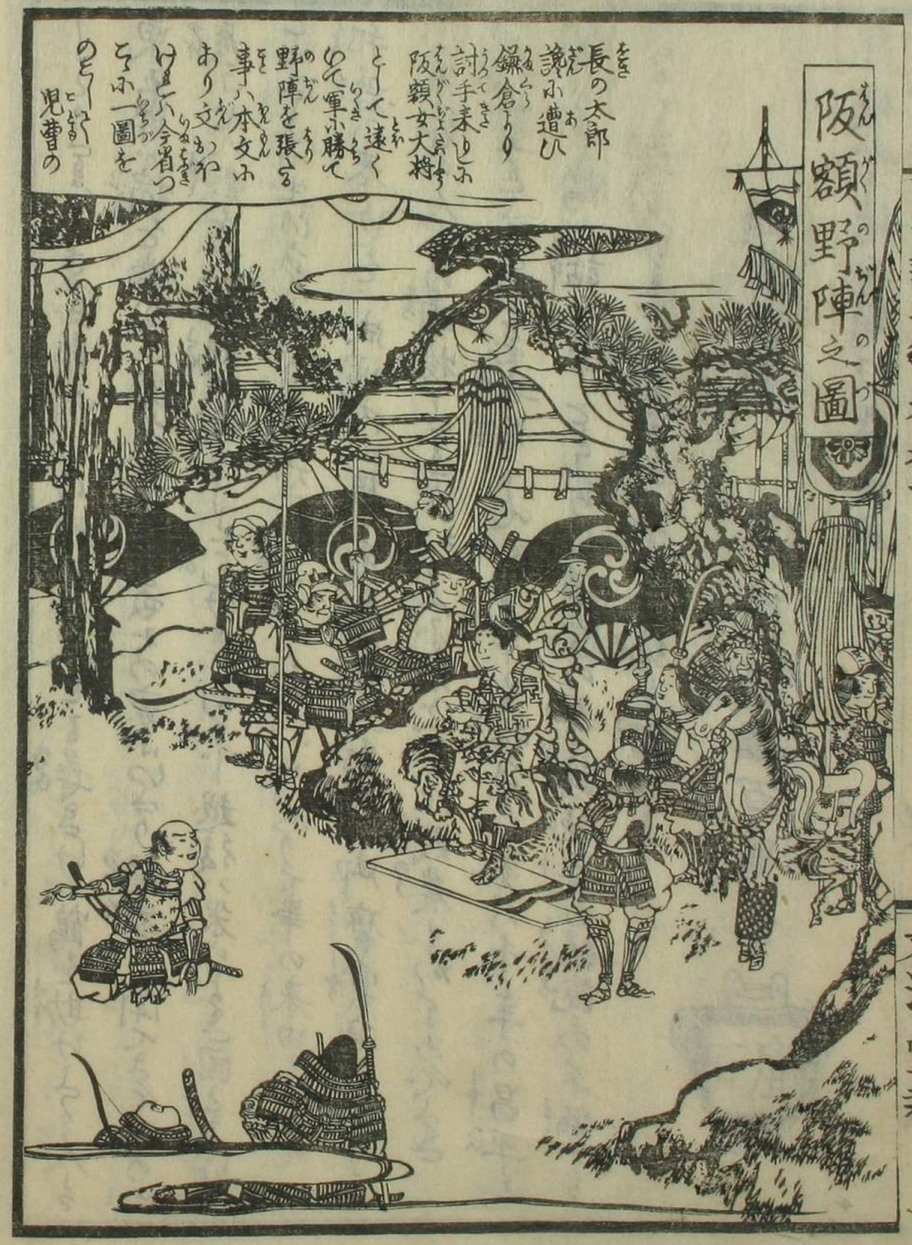
そめゆ作りもて〻ハ雪のゆゑなりいとんとあるまゝいとわゞつよく作ることも一丈のうへ
こそ雪ゆあゝ崩て〻ゆゑかゝつなりもきて雪のそゞめゆハ此垣をとりのくるなり
と語り〻事あるきさまゝ三月の末ゆなりまゝ我きゆゆと此垣を作る事なり
さて又雪中ハ馬足もたゞ耕作もせざまゝ馬ハ空〻厩ゆあるもなく事凡
百日あまり〻我国ゆ牛の雪きあるの時ゆなりまゝ馬もとく去りて去きなり
嘶き路ゆいでんとする心あり人も又久〻くちびりする足をのゞきせんとて厩を
ひきいゞもゞとろこびさて休あるなりのごとくを胴縄なりの躓馬ゆ騎り雪消の
所ゆて〻ら手此馬冬なりの飼やうゆて〻ゝ瘦ると肥るあり〻ゆもなるハ馬
主の貧さもあるものなり馬のなゝふあゝゆ童ごと〻雪のそゞめより外遊
をする事なゝぎり〻ゆ夏のそゞめゆいとうゝやう〻冬履稿沓をもて
草履せつゝふなり用ゆゞゆかつそ〻るハさるこゝとうまゝ〻さうなるまゝ桃
櫻も此ところをさるゆて雪ゆ世外の花を視るなり

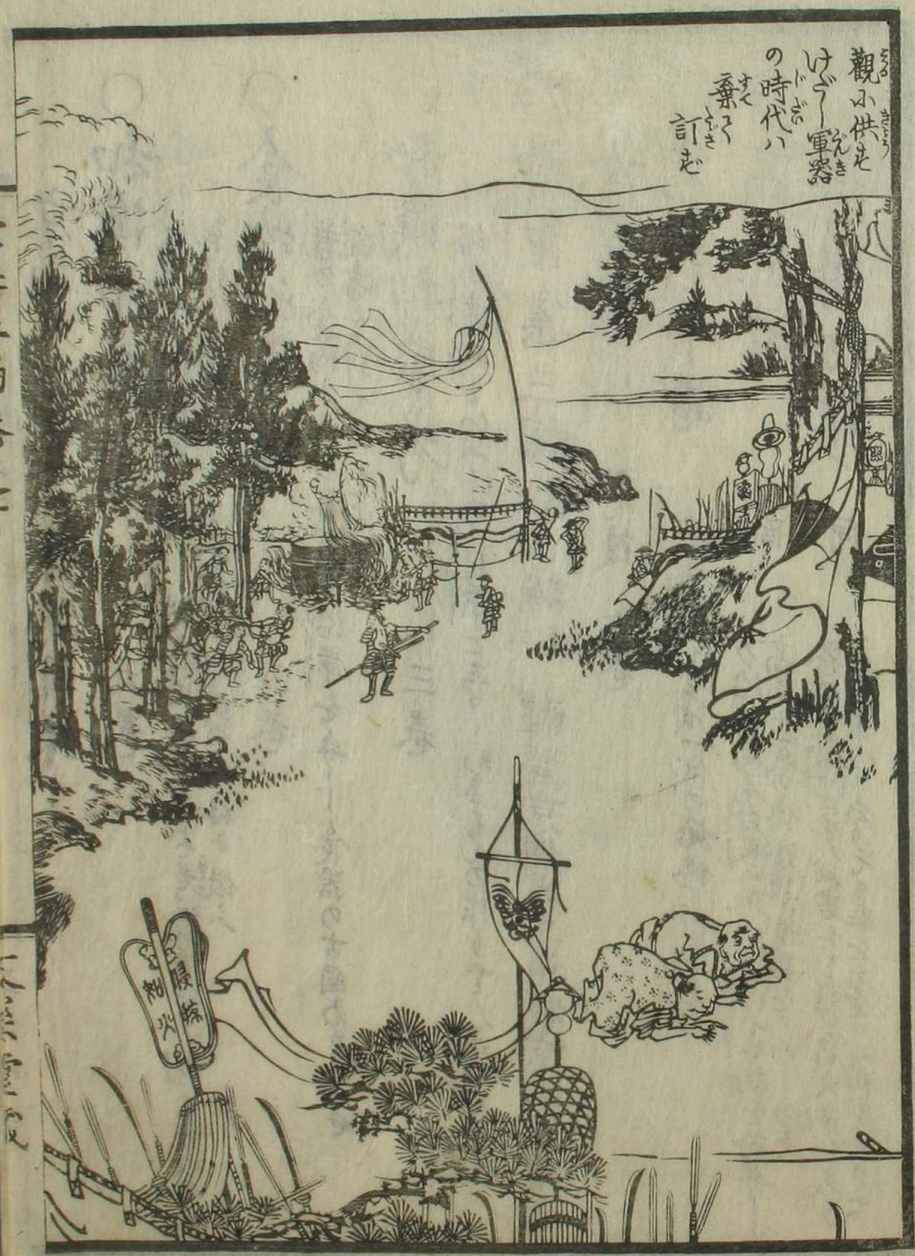
○鶴恩ふ報ゆ

天保七年丙申の春我が郡中小千谷の縮商人芳澤屋東五郎俳号を二松といふの商ひの為西國ふいてり或城下ふ逗留の間旅宿の主がそみ〳〵ふ此近在の農人おのゝが田地のうちふ病鶴ありて死ふいてんとするを見つけ貯さる人参あり〳〵鶴の病を養〳〵ふ日あり〳〵ぞ病癒て飛去りけりさて翌年の十月鶴二羽かの農人が家の庭ちく舞〳〵でり稲二莖を落〳〵一声づゝ鳴て飛さりけり主人拾ひとりて見るふその丈六尺ふあまり穂も是ふつまさ〳〵長く穂の一枝ふ稲四五百粒あり主人おどろくさてふ去年の病鶴恩ふ報んさの異国より咥えきたりて〳〵ゆん何ふもあまいとめづらしき稲のりとて領主ふ奉りけるふ主ぶ〳〵ぶめおもしろのちその主ふなりよりゆゆしとおわせふよりて苗のところふいてり心をつくして植つけるふ鶴があとふ〳〵ぞとく生ひいでけるを國の守ふも奉り

しとりて東五郎猶その村その人をも尋きけば鶴を助けしる人その東五郎が縮を賣る家あるべきぞ家ふいてり猶委く聞てさて国の土産ふせん穀を一二粒賜ふとりて〳〵とりけるべあるべ越後ハ米のよき国ときけば〳〵ことさ〳〵ふ生ひあんとそもそ五六十粒ちゝるを国〳〵持ありて事の来由をヤて邦君ふ奉りを御城内ふ植〳〵ゆ玉ひ東五郎〳〵御褒賞ありて在〳〵と小千谷の人その頃物がてりあるふ余がごと紀賤農もかゝるめでたき御代ふ生まさるべとそ安居〳〵てかゝる筆も採あまさるべ千年の昌平をいのりて鶴の話ふ筆をとゞめつ猶雪の奇談他事の珍説あふ漏〳〵るも最多けるべ生産の暇ふてびび編を嗣べ〳〵

通卷画圖　京水　岩瀬百鶴筆


阪額野陣之圖
長の太郎
義朝遺ひ
鎌倉より
討手来たふ
阪額女大将
として遠く
ひて軍に勝て
野陣を張る
事は本文に
あり文わ
けて八今省つ
て一圖を
のせ
児曹の


観小供も
けゞ軍器
の時代ハ
乗て
訂ぞ

京山人百樹翁著述目録

○和漢印章考　五卷
本朝古印の摸本を図し制度用格を弁じ考證漢印に倣ふを以て和漢と目をすべく朱象賢が印典の作格に倣ふ

○食物沿革考　五卷
昔の食物と今の食物の沿革を弁じ食器の古図をまとのせ諸書を引て考をまるせ

○和漢押字考　三卷
俗ふ書判といふもの起原をまるせかきたんの作りやうを論弁せり

○骨董集三編　二卷　四編　二卷　醒齋京傳先生遺稿京山翁増修

○女粧考　前後　六巻
そせ代一代の始終をまるせ

○芭蕉年譜　三巻
万治の高尾白双が死とりとらの妄説を論弁し

○高尾考　同
高尾十一代の傳遺墨遺器をまるせ

○茶の湯初心抄　同
茶のゆを学ぶる人此書をこれ[illegible]の大槩をまるせ茶席ふつゝかりて恥をえぐる心得をまるせ

曲亭馬琴翁編集

著作堂一夕話　全五巻
此書ハ曲亭翁七十余年の長寿ゆえ五十年來見聞せし事一珍説古今未発の高論ゆゑんどを弘く集め新奇妙談ふるく聽人実に曲亭に対してその話を聞ごとく諸君近きに発行をまちたまへ

御伽びうき　全十巻
この書ハ古今の奇談珍説の原本ゆゑ凡小説怪談の書多くこれに御伽びうきの上ふるものゆゑ和漢の奇談ことごとく巻中にふくして尽きざる変化実に怪奇の最第一の物語なれば人の本を作るゆゑ本ともなりぬべし

鶴鶏貞高先生著

閑窓瑣談　全六巻
豊年先生画
這ハ世ふるある随筆の旨趣と事うり雅俗を不倫博識ゆゑ珍文漢文をかゝげ老児女童蒙に慣易きをもくと助も学力自慢の事を載せ古人今人の偽の面白きを集めまくハ自慢の事を載せ古人今人の偽の面白きを集めまくハ養生ふるべき数ゆゑんとを巻にして巻を成けば益あるゆゑ最多

天保十三年
壬寅孟春

全志發行書林
大坂　心齋橋通順慶町　堺屋新兵衛
江戸　小傳馬町三丁目　丁子屋平兵衛藏版